

思いつくまま

治山事業100年

西日本新聞社 論説委員 浦田 裕

「誰も『戦後』を覚えていない」。前に読んだ本のタイトルがふいに頭に浮かんだ。

文春新書で、1945（昭和20）年の敗戦から5年間の暮らしが描かれている。著者は35年に東京で生まれた演出家の鴨下信一氏である。

戦後の暮らしはどうだったか。正しく理解するのは今や難しい。その一つに「闇市」がある。どんな雰囲気だったか。わずかに東映映画「仁義なき戦い」第1作（1973年）の冒頭シーンなどで窺い知れるぐらいだ、と鴨下氏は言う。

わずか60年ぐらいで敗戦直後の世相、風俗が忘れ去られてしまった。それだけならまだしも、誤った「常識」が流布している。著者はそれに半ば呆れ、半ば怒ってもいるのだ。

そんなことは他にもある。日本の山と森についても誤った常識が広がっているようなのだ。

「社団法人日本治山治水協会」は首相官邸の近くのビルにある。そこに旧知の山田専務理事を訪ねた。すると立派な本が出てきた。

タイトルは「よみがえる国土—写真で見る治山事業100年の歩み」。A4判213頁で定価8400円、今年8月に発行されたものだった。

全国の図書館などに贈呈しているという。私にも1冊やろうというわけだ。勉強しろというわけで、ありがたく頂戴することにした。

日本の治山事業は、日露戦争（1904～05年）のための膨大な戦費負担が峠を越えた1911年に開始された。すなわち、その直前が日本の山と森林が歴史上最も荒廃していた時代だった。

「写真で見る治山事業100年の歩み」の特徴の一つは、事業開始前後の写真と、それから60年から100年近く経過した写真を、できるだけ同じページに載せようとしていることだ。

これを見ると明らかである。かつてのハゲ山はいずれも緑豊かな山として蘇っている。

森林の収奪が本格化したのは江戸時代だという。家を建てる。薪に使う。製塩・製鉄などの燃料用需要も増えて森は伐採されていった。里山とは荒れ地で、人による収奪の象徴だった。

明治維新後の混乱はこれに輪をかけた。山の荒廃は数々の災厄をもたらすことになった。

大雨が降るとたちまち土砂崩れが起きる。土砂は河床にたまり、天井川となって氾濫しやすくなった。江戸時代に砂浜に松が植林され、「白砂青松」の美しい海岸が全国各地に生まれたのも、飛砂の被害を抑えようとした結果だ。砂の増加も山の崩壊が原因だったようだ。

いまは逆に砂浜の減少が全国的に問題になっているという。山々が緑に覆われるようになって砂の供給が細ったのが原因との見方がある。

戦後の熱心な治山事業によって山と森は蘇った。過去数百年間なかった状況が生まれた。だが、それが世間にははっきり理解されず、むしろ荒れた山々のイメージが強くなっている。

約4000点の写真から504枚を厳選した「写真で見る治山事業100年の歩み」は現状を分かりやすく伝えようとしている。ただ、写真を眺めただけで、そこまで読み取ることは不可能だ。

山田専務理事から併読を勧められた「森林飽和—国土の変貌を考える」（NHKブックス）の解説である。著者は太田猛彦・東京大学名誉教授で、専門は森林水文学・砂防工学・森林環境学と書いてある。「写真で見る治山事業100年の歩み」の5人の編集委員の1人でもある。

「飽和」がキーワードで、常識を覆される面白さがある。興味のある方はご一読を。（了）